F2-8

神奈川県下鶴間宿における集落変容に関する研究

A Study on Transformation of Village Community in Shimotsurumashuku, Kanagawa Prefecture

Abstruct: In this study, we investigated the transformation of the village in Shimotsuruma. As a result, it was clarified that there were three periods of change: development period, transition period, and decline period.

○生水出潤一郎[1]，押田佳子[2]
*Junichiro Shozude[1],Keiko Oshida[2]

１．背景及び目的—継立村(助郷)とは，江戸幕府による宿駅制度遂行のため人馬負担の夫役を課された周辺の村々であり，宿場町に比べ規模は小さく，東海道等街道に接続する脇街道沿いに設けられた．設立当初は夫役が大きな負担であったとされるが，庶民による参詣が盛んになった江戸中後期になると一定の賑わいを見せるようになり，継立村が現在の都市のもとになっているものも少なくない．しかしながら，これまでに継立村に着目した研究は少なく，歴史的な側面からの研究に限定されている．

そこで本研究では，矢倉沢往還(大山道）の継立村であった下鶴間宿に着目し，近世から昭和期までの集落構成の変容を捉えることを目的とする[1]．

２．調査対象地—下鶴間宿は相模国高座郡下鶴間村（現・神奈川県大和市下鶴間）にあった矢倉沢往還(大山道)の継立村である[2]．八王子道等と交差する場所に位置したことから，幕末には交通の要所として栄えた．また，下鶴間宿には宿の機能を果たした「宿」と呼ばれる地区と古くより集落の生業が展開された「坂」と呼ばれる地区があるが，本稿ではこのうち「宿」を対象とする．

３．調査方法—調査概要を Table1 に示す．

４．結果及び考察—下鶴間宿の変容を Table2 に示す．下鶴間宿の変容は各時期の特徴より，「発展期（江戸末期～明治5(1872)年）」「転換期（明治5(1872)年から大正14(1925)年）」「終焉期（大正14(1925)年～昭和47(1972)年）」に3分類した．

以降，これに基づき結果及び考察を述べる．

Table1. Outline of the survey(調査概要)　(This is original table by authors)

調査方法	調査期間	調査内容
地図資料調査	6月1日～9月21日	「下鶴間地図大正末期の家配置略図（明治 5 年, 大正 14 年）[2]」「大和市明細地図（昭和 47 年）[3]」を用いて, 家の配置や職業, 移転について調査する.
文献調査	—	市内の郷土史,「大和市史」[4] [5]「下鶴間宿史話」[6] [7]を中心に，下鶴間村と下鶴間宿について把握する.
ヒアリング・現地調査	6月30日 7月28日	下鶴間ふるさと館及び鶴舞の歴史資料館に対してヒアリング調査及び下鶴間宿周辺の現地踏査を実施した.

４—１．継立村としての「発展期」—Table2①より，かつての農村が江戸時代末期に大山御師を受け入れる定宿として発展した．旅籠は 5 軒あり，この他に染屋や居酒屋など宿場らしい商店が構えられた．また，郵便局や警察署が建てられるなど，地方の小村にも関わらず早々に近代化の影響を受けており，明治維新後も暫くは賑わいがもたらされていたことが窺える[6][7]．これは，下鶴間宿に村長や名主といった権力者が多く在住していたことに起因するといえる．

以上より，この時期の下鶴間宿は，小規模ながらも宿場らしいまちなみが形成され，近代化の影響を受け賑わいがもたらされていたことを捉えた．

４—２．軍の宿営地としての「転換期」—Table2②より，発展期以降，近代化の導入が進行したことに加え，大正期には戦勝による好景気や大正デモクラシーの影響を受け，商業の多様化が進展した．軒数は，発展期の 2 倍近くに相当する 50 軒であった．職種は，発展期に 5 軒あった旅籠が 1 軒へと減少した一方で，これ以外の多くの職種が増加し，特に新聞販売やタクシー等のサービス業が多く展開されることとなった[6][7]．また，厚木基地に近いことから，矢倉沢往還は軍用道路として特に重要視された．これに伴い，下鶴間は高級軍人の宿営地となったため，軍の演習による往来の都度，各戸が迎え入れるために座布団等を常備することとなった[7]．また，この時期の来訪者は，軍の演習見学に来た天皇陛下や乃木将をはじめとする錚々たる顔ぶれに加え，狩猟に来た外国人など，来訪者層にも近代化・軍国化の影響が窺える[6]．

以上より，この時期の下鶴間宿は，旅籠は衰退したものの，近代化のさらなる進展と軍事的な影響を受け，軍の宿営地として新たな需要が生まれていたことが捉えられた．

４—３．下鶴間宿の終焉期—Table2③より，1929（昭和 4）年の小田急江ノ島線開通により，地域の経済文化の中心は矢倉沢往還から鶴間駅や南林間へと移転

1:日大理工・学部・まち　2:日大理工・教員・まち

することとなった[8]．また，戦間期には軍都計画が進められたことで，下鶴間およびその周辺の土地は軍事施設などの建設のために強制収用された．終戦後には，朝鮮戦争を契機に工場の進出が相次いだことに加え，東急電鉄の大規模な開発行為等により住宅街が形成されるようになった[9]．これにより，下鶴間宿では昭和期に旅籠が完全に失われ，転換期にみられた住戸は24軒へと減少した．一方で，転入者により下鶴間宿全体では 91 軒となったことより，これまでとは全く異なるまちなみが形成されたことが捉えられた．

以上より，この時期の下鶴間宿は，鉄道の開通や戦後の周辺開発等の影響を受け地域の中心性を失ったことで，継立村の宿としての機能が完全に終焉を迎えたことを捉えた．

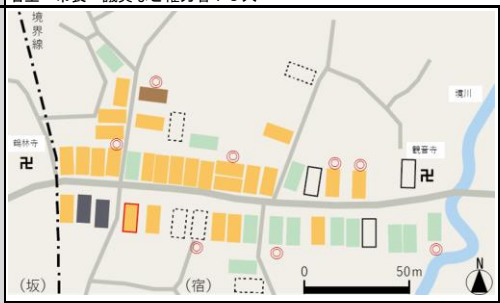
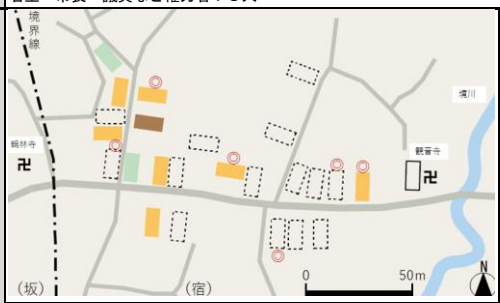
５．まとめ—以上より，江戸中後期に発展した下鶴間宿は，近代の目まぐるしい世相の影響を受け，継立村の特性を継承した軍の宿営地へと転じ，戦後は完全に終焉を迎えたことを捉えた．

今回の研究では，1 つの宿の発展から衰退までを追いかけてきたが，他の宿と比べて考察を行うことができなかった．次回の研究では他の宿まで調査範囲を広げていきたい．

６．謝辞—本稿におけるヒアリング調査に際し下鶴間ふるさと館，鶴舞の歴史資料館のご担当者様に多大なるご協力をいただきました．この場をお借りして厚く御礼申し上げます．

７．参考文献—[1]「大和市史研究　11～17 巻まとめ」，1990[2]萩原清高，「相州下鶴間地名考」，1966[3]大和市明細地図，1972[4]「大和市史第 2 巻」，1983[5]「大和市史第 8 巻下」，1996[6]浜田賢，荒谷康司，「下鶴間の史話」，1991 [7]浜田賢，荒谷康司，「下鶴間の史話：続編」，1994 [8]「大和市文化財調査報告書　第八十五集　大和市の社寺建設」，2003[9]「東海道宿駅制度四〇〇年　企画展 矢倉沢往還と下鶴間宿」，2001

Table2.　Survey results about Transformation of Village Community（下鶴間宿の集落変容）　(This is original table by authors)

時期		宿周辺地図	下鶴間の出来事（抜粋）	国内状勢（抜粋）
①発展期	江戸末期～明治初期		・江戸より 11 里余にあり，1 日の行程は歩いて 10 里といわれ，下鶴間宿は恰好の泊地となった． ・矢倉沢往還とこの宿で交差している八王子道の人馬継立を行っていた． 更に，御鷹御用捉飼場になっており，鷹匠の廻村の節は休泊賄いや人馬継立も行っていた． ・駅郵には宿場ごとの取次をする飛脚を置き，手紙や品物などを遠方に届ける事務を行い，下鶴間宿は馬２頭が置かれていた．	・江戸時代中期以降，庶民による物見遊山としての大山講が盛んになり，最盛期には年間 20 万人を超える人々が大山詣りに訪れた．山麓には多くの宿坊や茶屋が建ち並び，大変な活気であった．[3] 1853（嘉永 6）年　黒船来航。継立人馬の必要性高 1854（嘉永 7）年　日米和親条約（開国） 1862（文久 2）年　生麦事件 1869（明治 2）年　版籍奉還 1871（明治 4）年　廃藩置県。以降、幕府の支配がなくなる
		下鶴間宿の集落構成		集落内の職業構成
		下鶴間宿住戸軒数：27 軒 名主・市長・議員など権力者：９人		農林水産業：６種６軒 ／ 工業：なし ／ サービス業：５種 12 軒（旅籠５軒） 公共：２種２軒 ／ その他：２種２軒 ／ 不明：６軒
②転換期	明治5年～大正14年		・下鶴間の鶴林寺が自由民権運動の演説会場として使用される ・明治維新後，矢倉沢往還は軍用道路として重要視され，周辺一帯は軍の演習地となった ・下鶴間は軍の宿営地となり，各戸に皆布団等が常備された． ・厚木基地において軍を統監されるため明治天皇や大正天皇，伏見宮貞愛親王殿下，乃木大将など錚々たる面々が下鶴間に宿泊された． ・高級軍人が演習の下見や駐屯地の設営のため逗留することが多かった． ・外国人の狩猟客が多かったため，下鶴間宿には常時案内役が置かれた．	1883（明治 16）年頃，自由民権運動が盛んになる 1904(明治 37)年～1905（昭和 38）年　日露戦争 日本における資本主義の急速な発展と成長は，日本国民に政治的・市民的自由を自覚させるに至った． 1914（大正 3）年～1918（大正 7）年 第一次世界大戦による対戦好景気が訪れる． 1910（明治 43）年～1920（大正 9）年 大正デモクラシー 言論・集会・結社の自由に関しての運動，社会面においては男女平等の自由等，自由に対する運動が相次いだ．
		下鶴間宿の集落構成		集落内の職業構成
		下鶴間宿住戸軒数：50 軒 名主・市長・議員など権力者：８人		農林水産業：13 種 13 軒 ／ 工業：１種１軒 ／ サービス業：23 種 26 軒（旅籠１件）／ 公共：２種２軒 ／ その他：２種３軒 ／ 不明：５軒
③終焉期	大正14年～昭和47年		・小田急江ノ島線の開通後，宿内の住戸や銀行，郵便局等が南林間駅や鶴間駅に拠点を移す． ・大和村以西には海軍飛行場として厚木基地，首都防衛を目的とした飛行機を製作する大規模な高座工宵が建設された． ・下鶴間地内に海軍士官や技師などの宿舎が建設された． ・1969～1970（昭和 44～45）年頃，名主Ｈ家の東側の水田地帯が殖産住宅株式会社に買収され，住宅街へと変貌した．	1929（昭和 4）年　小田急江ノ島線の開通 1938（昭和 13）年　海軍航空基地（厚木基地）の設立 1939（昭和 14）年～1945（昭和 20）年　第二次世界大戦 軍都計画により，座間に陸軍士官学校，相模原に陸軍通信学校，陸軍病院等の軍の施設が次々と下鶴間周辺に建設される． 1955（昭和 30）年頃　朝鮮戦争を契機に町の財政振興策として工場の誘致が行われる 1972（昭和 47）年頃～　東急電鉄を中心としたつきみ野住宅地の開発
		下鶴間宿の集落構成		集落内の職業構成
		下鶴間宿住戸軒数：91 軒（うち転換期より継承されている軒数：25 軒） 名主・市長・議員など権力者：６人		農林水産業：２種２軒 ／ 工業：１種１軒　サービス業：７種７軒（旅籠０件）/公共：なし ／ その他：１種１軒 ／ 不明：14 軒

【凡例】　：サービス業　：旅籠　：農林水産業　：工業　：公　：その他　：不明　◎：有権者　卍：寺　：川